

パウル・クレー 《破壊された村》



パウル・クレー (1879-1940)
《破壊された村》

1920年
油彩・厚紙にアスファルト下地
平成28年度購入

ス

イス出身のアーティスト、パウル・クレーの作品で、第一次世界大戦終結間もない一九二〇年に描かれました。ドイツ人の父を持ち、ミュンヘンで活動していたクレーも大戦に従軍し、親友の画家フランツ・マルクを失うなど不幸に見舞われています。画面全体を覆う暗い色調、中央の黒い十字架を掲げた教会、右へ、左へ傾いたいくつかの白い建物、そして「破壊された村」という題名など、この作品に戦争の記憶が反映しているであろうことが容易に想像されます。

クレーの制作はしばしば、規則的な色の塗り分けによって画面を分割したり、円や四角、三角といった幾何学形態を組み合わせたことから始まります。そして制作がある段階に達したときに、それらの抽象的な形や構成が、具体的なイメージへと「変化」する、その瞬間を捉えようとするのがクレーの造形手法です。たとえば、そのような変化、イメージの現れをつかもうと、クレーはしばしば制作中に画面をぐるぐると回転させることもありました。あらかじめ描き出す対象や光景が決まっている場合には、なかなか考えられない方法です。

このような制作の在り方を、クレーは有機的で、動的な「生成」という言葉で説明しました。たとえば一九一四年の日記には

以下のように記されています。「創造的なのは、まさに途中の過程であり、これこそもっとも大切なもので、生成(Werden)は存在(Sein)にまさる」(『クレーの日記』南原実訳、新潮社、一九六一年、三三三頁)。

この作品においては、たとえば円は、時に「赤い太陽」に成るし、時に「灯火の消えた蠟燭が載る燭台」に成る。さらに画面下部のまんなかあたりを見てみましょう。矢印は「↓」を向けば、画面の陰鬱な調子を倍加させる否定的運動を示す記号と成る一方で、「↑」を向けばなんと、矢印は枝を増やして生育し(↑)、樹木に成る。

この作品の制作と同じ一九二〇年、『デア・アラート(Der Artist)』誌第二特別号「クレー特集」に、クレーは以下のような言葉を残しています(ちなみにこの言葉は、クレーの墓石に刻まれたものでもありません)。「この世では私を捉まえることはできない。なぜなら、私は死者たちのものと、そして未だ生まれていない者たちのものと棲んでいるのだから」。

破壊と創造、過去と未来。画面に現れるさまざまな形や色が、変化のただ中に置かれていることに気づくと、暗い破壊の調子を帯びたこの作品世界のあちこちに、生成の予感がほのかに浮かび上がってきます。

(美術課主任研究員 三輪健仁)